審査の結果の要旨

論文提出者氏名　水野達朗

水野達朗氏の「明治文学のエマソン受容―透谷、独歩、泡鳴」は、１９世紀中葉のアメリカの思想家Ｒ・Ｗ・エマソンの著作が、明治期日本の文学界にいかなる影響を及ぼしたのかを、北村透谷、国木田独歩、岩野泡鳴等の事例に焦点をあてて論究したものである。エマソンの難解なテクストをみずから読みときつつ、透谷、独歩、泡鳴ら明治期の文学者たちが、テクスト読解の場においてどのようにエマソンを理解し、これを自らの思想的営為にどう生かそうとしたのかを実証的に跡づけた労作である。

水野氏の論文の特色は、思想の受容として語られる傾向にあった、明治期におけるエマソンの影響研究を、テクストじたいの読みに立ち戻って、エマソンのテクストそのものの受容として考え直した点にある。論証の過程では、現行の数種の翻訳の問題点にも言い及びながら、エマソンのテクストの行文に寄り添う形で、それが、どのような読みと解釈をまねき寄せうるものなのか、いくつかの可能性が慎重に考量されており、受容の場における偏差が鮮やかに浮き彫りにされている。これは、従来行われてきたエマソンの受容研究の水準を抜く、まことに手堅い学問的手続きであり、比較文学研究の一つの範例を示すものであると評価できる。さらには、透谷、独歩、泡鳴らによるエマソン解釈を通して浮かびあがる、エマソンのテクストに内在する特色も指摘されており、比較文学研究上の成果を、広くエマソン研究へと還元しうる視野を孕んでもいるとも言えよう。

本論文は透谷、独歩、泡鳴それぞれを論じた三部から成り、これに序章と終章及び詳細な注と文献表が付されている。以下、論文の構成にしたがって内容を紹介する。

序章において水野氏は、まずエマソンという思想家の特色と、明治期の文学者の関わりを整理する。『自然』『第一論文集』『第二論文集』『代表的人物』等の著作で知られるエマソンは、ユニテリアン派の牧師として出発し、個人の独立と精神の修養を重んじるトランセンデンタリズムの立場を明確にして、合理的な認識と宗教的啓示との接合を図った。こうしたエマソンの思想は、宗教家や社会改良家など広く明治期の知識人に注目されたが、ことに文学の分野に深い影響の跡を残したのは、文学とはいかにあるべきものか、広義の「詩人」とはいかなる存在であり、どのような精神を体現すべきであるかという、時代の根元的な関心に応えると考えられたからであった。その上で、文学者それぞれの志向に応じて、様々な思想的傾向がエマソンに付会された、というのである。

第一部は、北村透谷の『エマルソン』におけるエマソン理解と、そこに至るまでの軌跡を、特に「人生相渉論争」のなかに跡づけようとしたものである。明治二十六年、透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」によって、山路愛山とのあいだに戦わされた議論は、巖本善治、徳富蘇峰、植村正久、森鴎外、坪内逍遙、平田禿木らを巻き込んだ論争へと発展する。そこでは、文学に社会性を求める功利主義的立場や、精神性・道徳性を重視する立場、さらには文学を宗教や道徳から独立させようとする立場が相対立していたが、エマソンは、いずれの立場からも自説を補強するテクストとして引用、参照されている。そうしたなかで透谷は、文学の思想的、社会的文脈を意識した立場を貫いており、これが彼のエマソン

解釈にも、大きな影を落としている。水野氏は、『エマルソン』に見られるテクスト解釈の個々の事例に則しながら、とくに、透谷が文学表現における「理想」と「現実」との融合を図ろうとする論理のなかに、エマソン理解のある限界を見ることができることを鋭く指摘している。

第二部は、国木田独歩の日記『欺かざるの記』と、「源おぢ」「武蔵野」「忘れえぬ人々」等の小説における、エマソン受容の跡を論じたものである。『欺かざるの記』に記される自己形成の過程において、独歩は「詩人」を志向する一方、平凡な自己のありようをも見つめざるをえず、感情の高揚した瞬間と、日常的な時間のあいだの断層を自覚する。自己を語り、自然を記述することにいかなる意味があるのか、これに「詩」としての価値を与えるものは何かに悩むのである。エマソンは、そのような内面の葛藤に表現を与えうる上で、独歩に深い影響を与えた。自己の真実が普遍性を持ちうるにいたる契機を、独歩はエマソンのテクストに発見したのである。そうした、卑俗な事物に「神聖さ」を見いだそうする態度は、「小民」を描く独歩の短編の語りにも通底する、と水野氏は論じている。

第三部は、岩野泡鳴の『神秘的半獣主義』と、いわゆる『泡鳴五部作』を中心に扱い、泡鳴の「表象」説と「刹那主義」におけるエマソンの影響の跡を辿っている。泡鳴の「表象」説では、事物のあいだに照応関係を見いだしてゆく過程と、照応関係の変容そのものに焦点があてられており、「刹那主義」においても、外部世界と自己の精神とが対応する「刹那」が重視される。このような思想の成立には、エマソンのテクストと格闘した泡鳴が、精神世界と外界の事物との交錯をめぐって、相反する記述が唐突に接合されるエマソンの文体そのものの機微に触れえたところが大きいと、水野氏は主張する。そのような綿密な読みから、泡鳴は、従来エマソンの思想に関して言われてきた「唯心論」や「楽天主義」に収まらない、多面的な側面を見いだした。『泡鳴五部作』は、そのようなエマソン理解に立ち、ある「刹那」に世界が変容し、現実世界と想像の世界が二重化するさまを一つの主題として描き出した、とするのである。

終章は、エマソンの文体に見られる特徴を「非連続」と表現することで、改めてエマソンのテクストの特質と、その思想を論じたものである。この章では、アメリカでのエマソン理解の新しい傾向を指摘しながら、それがエマソンの「非連続」な文体そのものへの注目にはじまることが強調されている。すなわち、エマソンのテクストと取り組んだ明治期の文学者、とくに泡鳴の読みと理解が、エマソン研究の現状をある意味で先取りしていることが確認されるのである。これは、地道な影響研究が、広くテクスト理解に貢献しうることを示すものとして、比較文学研究の可能性を再確認するものといえよう。

以上のように要約される水野氏の論文に対し、審査委員からは、以下のような評価、批判が寄せられた。まず、水野氏がエマソンのテクストを自ら綿密に読み解き、日本におけるエマソン受容の研究において、従来不明とされ、また等閑にされてきた多くのテクストの出典を明らかにした点が、高く評価された。思想の受容としてではなく、テクストそのものの受容の場を、読解、翻訳のレベルで再現し、明治文学へのエマソンの影響に関する創見に満ちているという意味で、水野氏の労作は、今後、受容研究の基本文献たるを失わないであろう。一方で、水野氏の叙述にやや過度に禁欲的な面があるために、明治期におけるエマソンの全体像が、うまく浮かびあがってこないという指摘もなされた。それは「時代」や「人」への顧慮が足りないためでもあろうし、ソローやホイットマンといった、エ

マソン受容の文脈を考える上で、必須の文学者たちへの目配りに欠けているためでもあろう。時代と思想の関わりを、総合的な広い視野から考察することが課題であるし、エマソンを受容した透谷、独歩、泡鳴らの詩を論じることも、あるいは必要であったに違いない。また、エマソンを論じる際、アメリカ文学研究における共通理解に依拠することが少ないために、かえって読者のとまどいを招く結果に陥っていることにも留意すべきであろう。

テクストの分析と叙述に繰り返しが多く、同じ引用が論文中に数度行われることがある点について、審査員全員から苦言が呈された。また、論文全体がほぼ同じ密度で書かれていることに関し、読者へのさらなる配慮が必要であろうとの意見も表明された。

細部については、文献注の書き方、引用文の句読法、固有名詞のカタカナ表記、不適切な訳語、英文解釈の誤り等、いくつか指摘があった。ただし、これらは瑕疵というべきものであって、水野氏の挙げ得た功績を何ら損なうものではない。

したがって、本審査委員会は、水野達朗氏に対し博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。